

# 山と博物館

第19巻 第6号 1974年6月25日 大町山岳博物館



ベニシジミ

撮影 齊藤忠彦

## 四本足のニワトリ

六月二十一日付けの毎日新聞に、こんな記事が載っていた。秋田大学で、学生に、ニワトリの絵を描かせたところ、毎年一〇〜一五%が「四本足のニワトリ」を描いたというのである。担当教授の話では「冗談ではなく、たぶん安定が悪いから、突かい棒として、二本書き加えたのではないか。」という。

私達の子供の頃は、どこの家でもニワトリの五羽や十羽は、飼っていて、卵を自家用にしていたものだ。ところが、今では、農家でもめつたに見かけない。どこで見かけるかというと、養鶏舎の中に、それこそ機械の部品のように並んでいる。そのうち卵というのは、機械で造られるという事にでもなるのではないか。

ところで、二本足では、安定が悪いから、四本足にしたというのは、きわめて「合理的科学的」発想であると思う。現代人の心理の一面を、ものみごとに、象徴しているのではないだろうか？ 科学は、現実の人間—自然の関わりの中から生れた。中世の信仰—迷信の谷間から、人間を救った事は、今でも、誇らしげに、語られている。だが、そのようにして得られた科学的「真理」で、逆に現実を観ようとすると、科学的「普遍性」の名の下に、多様な現実を「いびつな形」で切ってしまうているのではないか。現在、進行している自然破壊の問題も又、そうした発想と無縁ではないような気がする。

アスファルトやコンクリートの画一化は、一面の合理性や有効性を持つが、それは多様な自然をも画一化してしまっているのではないか。

科学的知識が、現実からかい離し、独り歩きする時に「四本足のニワトリ」は生れる。私達は、「科学性」を粉飾したエセ科学主義や、いわゆる科学の限界を見つめ、現実の中で、物を観てゆきたいものだ。

(荒井今朝二)

# 北ア為右衛門吊岩での遭難

青木 治



昭和26年の集団登山一行 白馬岳近

北アルプス連峰への登山は、昔は信仰とか狩猟のためのものであったが、明治時代近代登山の夜明けとともに、山を科学する登山、スポーツとしての登山となり、更に最近では観光的要素が多分に加わった、軽い気持での登山をする者が非常に多くなった。それにつれ夏山でも遭難という悲劇を繰返す数が多い。

なってきた。これらの悲劇は心掛けや装備の不完全さ、ちよつとした気象の変化によつてもよく起つている。落石、雷雨、転落、増水など気象の急変に原因するものが多い。

登山の盛んになったこの頃は、学生、生徒、各種山岳会、会社、工場などの集団登山が夏山では非常に多くなった。中でも山麓の学校の集団登山は、大正の中頃から行なわれてきた。伝統をもつこれらの学校では、経験を生かして慎重に決行されてきているが、それでも悲劇は根絶されない。

六五年回顧(大町高校史)の昭和二十六年の条に次の記事がある。「六月三十日第四回全校集団登山舉行、烏帽子岳、梅池、白馬岳、八方山、鹿島槍ヶ岳、針ノ木岳、燕岳、燕一槍ヶ岳縦走、常念―燕縦走等北アルプス全連峰五〇〇名参加。原光義君為右衛門吊岩地点で墜落死。

戦後の計り知れない不安と虚脱状況の中から脱却し、より崇高な精神を求めて、この意義と目的のために北ア教室を設けての最初の悲劇である。」とある。

六月三十日、北ア十一峰へ集団登山したその中の常念、燕縦走隊五十八名中の二年生、原光義君(十六才)の遭難のことである。

六月三十日常念小屋に一泊した一行は、小雨さえ混った早朝の濃霧が晴れた候が好転したので、梨子田、青木(筆者)、清水OB、笠原リーダーの指

揮により、本日のコースである横通岳―東天井岳―大天井岳―燕山荘へと出発した。途中大天井岳の西肩で昼食をとり、昨夜燕山荘で一泊した燕隊の十数名が大天井の頂上まで出迎えてくれたので合流し、午後一時に大天井岳の頂上を出発した。切通しの危険な箇所も無事通過し、遭難現場二〇メートルの手前で更に隊列を整えて進んだが、標高二六八二メートル為右衛門吊岩という地点で、原君はスリップによる転落遭難をした。この場所は高瀬川溪谷よりから中川谷側に出る尾根道の曲りくねった悪路の上に、幅四メートル位の残雪があり、藪が多く見通しの悪い地点であった。(現在は相当によく道を直してある)。「落ちた」の叫び声とともに、笠原、清水OB、梨子田、青木両教諭、松田、鎌倉、飯島等が下降、その間五分―十分位と思われる。遭難の原君は頭部を岩と雪溪の間に突込み、体の一部も入っていたので落下が停止されたと思われる。ただちに四メートル下方に一坪位の平地を作り、そこまで運び下ろして注射をし、頭部の傷を包帯したが、容態は殆んど絶望的であった。転落は約五〇メートル下方で、傾斜度は三〇度位であり、雪溪の途中は藪が多く、岩石もところどころに出ており、最も条件の悪い場所でもあった。すぐ後を歩いていた学友は、あおむけになり、足を下方に向けてスリップしたという。

傷の手当てその他で一時間余、筆者の燕山荘への二回の救援(梨子田教諭、清水OB、生徒数名は現場で見守る)往復で見通を得、岡村、黒岩(大工)、特に黒岩氏(燕山荘従業員で筆者の幼な友達)の親身な活躍で、ダケカンパの担架を急造し、五〇メートルの谷底から一寸刻みに尾根道まで引上げたが、その途中で絶命した。更に筆者の知人で有明山案内人組合の田口、吉田両氏の救援が中房よりあり、生徒有志十数名と共に、夜十一時頃までに燕山荘へ運び込んだ。そして夜食を済ませ、生徒十数人の屈強の者と、青木、梨子

田両教諭に前記の吉田、田口両氏の運搬で、電池とローソクの灯をたよりに夜を徹して燕山岳の急坂を夜明までに中房に下った。桜沢の地点で松川村消防団、隣組の救援隊に合流し、一の瀬で有明駐在所受持巡査と隣組の医者菅沢氏により検死を済せ、トラックで昼近くに松川の生家に帰った。

大町駅の下車口の天井に登山の安全を祈念した母子像の情愛に充ちた油絵の額がある。この絵は遭難により子を失った母の気持を描いたものと思われる。子を失った母の悲嘆はどんなであつたらうか。元気で喜々として出発した息子がトラックで屍となつて帰つてきた。「元気で行つたのに……、今はこのような……」と遺体にとりついた姿、その目、私も二日と一晩一睡もせずの体でそのまなざしを受けとめたが、人の子の父として、その死の厳粛さと恐ろしさを痛感し、生きていることのはかなさを強く感じた。

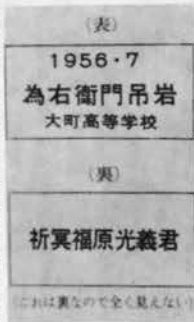
遭難というものは、人間が予期しない、全く思いもよらないところにあるものである。四十二年の深志高校の西穂高岳の雷撃遭難もそうであるが、原君の転落もそういう向があつたと思う。山登りする者の、特に指導者となる者は、常に心の奥底に不慮の落穴を想定しつつ、細心にして大胆な登山の計画をせねばならない。

原君の遭難の原因の一つに履物の問題があつたと私は考えている。当時は終戦六年目で物資が少し出まわしかけた時代で、どんな物資もなかなか手に入らなかつた。原君の葬儀の前日、お母さんが「こんな新しい良い靴を履いて行って……。」と言つて、私の目の前に出してくれた遺品の靴は、底裏に丸鋸を打った新調の軍隊靴であつた。恐らく履物のない当時であるから、息子のために手を尽して買ったものと思われる。軍隊靴は平地でも滑り易く、まして急傾斜の雪溪を歩く時は滑つて危険の上もない。当時の登山家の履物としては、登山靴は金のある登山家のはくものと

考えられており、多くはわらじで、最適で上等品がゴム底足袋と相場が決つていた時代であるから、軍隊靴を許可したのは、経験が少なく、知恵がまわらなかったためと思う。次に考えられることは、安心感というのか、気のゆるみというのか、そのことである。二日目、常念小屋を出発してから大天井岳の西肩までは、すでに十数回の登山経験をもつ私が笠原リーダーの後に、彼をアドバイズし、五十八名をまとめつつ進んで来たが、昼食時に昨夜燕山荘に一泊した十数名が下川教諭と共に、大天井岳の頂上まで迎えに来てくれた。そこでこれから先の道路状況もわかつたし、すでに槍隊の五十余名も午前中に通つた後でもあるので、職員もOBも生徒も少々安易感をもつた。また、ここは危険度の少ないアルプス銀座であるという観念もあつた。更に悪いことには、大天井岳からの出発は笠原リーダーの常念隊の隊列の中に燕山の出迎え組も混つたので、隊として集団行動に楔が入つた結果となつた。最経験者の私も安心感で、ここから最後尾についた。大天井・燕山の尾根の南側には、この年吹きだまりの雪が多く、雪庇も各所にあつた。所々にある四一五メートルの雪溪のトラバースは、一足一足の動作が必要であり、最先頭のリーダーは常に雪道づくりで進んだ。雪溪の斜め下降のトラバースは滑ることに注意を集中しなければ危険である。恐らく腐つた雪に滑つたのである。不注意であつた。また、私が先頭におつたらと悔まれてならない。(私は昭和十四年六月、原君の墜落地点から四一五メートル廻つた箇所でも五メートル位雪溪を落ち、ピッケルで制動して命拾ひした経験がある。)登山は怖がるまで、安心感や安易感禁物であるとしみじみ感じた。

昭和三十三年は原光義君の七年忌にあたるので、現場に慰霊碑を考えた。私はその許可を得るため、松本、大町の営林署に日参した。山の関係者の言分は、遭難者の慰霊碑を

はじめから作れば全山の要所は殆んど墓場になり、山の神聖上、観光上あるいは還境上大問題であるとの反対され、また国法上からも許可できないとのことだつた。そこで計画を変更して風致をそこなわぬ「為右衛門吊岩」という地籍を示す道標として許可を得た。私は現地に一人で三回登山し、学校で作つたプロンズの道標を技術者とともに背負上げ、尾根道の上部の岩石に密着させて。その年の七月十日全校登山の日



この遭難以後の第一回目的北ア教室では、「山を科学する」という目標をかかげた。しかし、地質、動植物、昆虫、気象、山の保健あるいは私の提唱した全山への登山者の実態調査等の研究的な仕事はしだいに影が薄くなり、体育登山オンリーとなり、無事登山さえできればという風に変化してきた。

しかし、この全校一斉の登山は、若い彼らの心に大きく食い入っているようである。原君の同級生である丸山玉樹君の翌々年の卒業式の答辞に「私達は創立五十周年を迎え、意義ある大中の伝統の摂取と、……中略……危険と苦難に耐えながらも楽しく登つた全校登山の壮挙に、いよいよ深められました。……後略」と感慨を述べている。この原君らの同級生の中に、日本で有名な登山家である平村克敏君や曾根原惠天君らがいるのも偶然とは思えない。(元大町高校教諭、北安曇誌編集委員 大町市文化財保護審議委員)

## 集団登山の引率者として

### 丸山 精一

集団登山というと学校集団登山が代表されるが、広い立場から考えると、市民登山から信仰的グループの登山まで、いろいろなものがある。これらの登山には山の高低とか難易とかにかかわらず、一貫して引率には安全に對しての常識的な指導者を選ぶことが大切である。そこで、引率者に対して望まれる基本的な条件を次にあげてみた。

- (1) 一つの登山行動を通じて、安全かつ満足できる山行計画を立てられる、経験の豊かな人でありたい。
- (2) 集団行動に必要な秩序と規律、義務と責任等を正しく認識して互いになごやかなグループをつくって登山の待ち主で内面的能力の持ち主でありたい。
- (3) 身心ともに優れた引率者としての責務の完遂に労をおしまない人。基礎知識と技術の修得に常に努力し、「慎重にして大胆」な、「自己を知り、引き返す勇氣」のある精神の持ち主でありたい。

次に引率者に選ばれた人は、次のような事前の指導をしておくことが大切と考える。

- (1) チームワークが生まれるよう、お互いに心の交流ができる会合をもつこと。
- (2) 食糧についての基本的な考え方の指導。
- (3) 装備についての知識と正しい使い方の練習。これにより、安全度が高まってくる。
- (4) 地図上の登山をし、概略をつかませること。これによって余裕が生まれてくる。
- (5) 安全対策が一段と強化されるよう、救急法、救急的対策、トランシーバーの使い方、ツェルトザックの使い方の指導を行なう。
- (6) 雨天時、雷等に対する研究。これにより、登山の難しさを知ると同時に、正しい行動ができる。

これらを学ぶことによつて、難しい登山も安全であるためには基本的なものをマスターすることが大切であることを悟るであろう。また、ただ人に連れて行つてもらうというような他力本願的なものではなく、自分の登山であるという認識も生まれてくるだろう。そして、精神的にも肉体的にも、本当に自分の登山行動に責任がもて、楽しい山行ができるものと思ふ。

次に実際の登山行動で必要と思われるのは、

- (1) 出発前の精神的、肉体的異状の調査。
- (2) 準備体操、荷物の点検、靴下、履物の指導。
- (3) 荷物の重い方、歩き方、登る順序、休憩などの時間のとり方、水・おやつ・食事のとり方の指導。
- (4) その他、行動中に細かい集団への注意力が要請される。例えば、弱い者を先へ出すとか、荷物を軽くするとか、その集団にあつた登り方の指導が必要とされる。引率者は落伍者が出る前に適当な処置をとれなければならない。従つて、引率者は行動中は常に危険を伴う登山行動に気を安めることなく、ふだんから緊張の連続に耐えられる訓練をしておかなければならない。この登山が成功のうちに終つてこそ、はじめて登山の喜びが味わえるわけだ。もし事故でも起つたら、死ぬまで残る心の痛手となつてしまふ。

最後に、集団の引率を引き受けるに當つて、その人の自信と覚悟が登山の成功か否かを決定させるものと思ふ。引率者は常に謙虚で、この計画を完遂させるために全力投球をおしまず、信念に立つた決断力の腹だけはほしいものである。

(山岳総合センター専門主事)



# 小鳥の声を聞く会

降旗英子



五月二十五日(土)、二十六日(日)にかけて大町山岳博物館では、大町市民館、大町市商工観光課などと共催で「小鳥の声を聞く会」を開催した。山博ではこの探鳥会を、昭和三十四年から恒例の行事として毎年計画し、鹿島―黒沢高原、佐野坂などで行なってきたが、今年も昨年と同様、山岳総合センターで二泊し、山岳博物館裏の鷹狩山を会場とした。参加者は主催者側も含め約七十名で、

小学生、中学生の参加が目立った。大町市内の人が大部分であったが、松本市や伊那市などからの参加者もあった。

五月二十五日は午後五時から山岳総合センターで受け付けをはじめ、開会式、オリエンテーションを行ない、食事の時には参加者全員が自己紹介をやり、自分の年や学校などをユームアを混じえたり緊張したりしながら、ごやかな雰囲気で行なわれた。

食事のあとは、スライドによる野鳥の学習で、長野市南部小学校の佐野昌男先生にいろいろな野鳥やめずらしいスズメの生活様式、植物などの説明を、一時間半にわたっていただいた。小学校二年生から六十五才の方まで幅広い参加者を相手に小学生にもわかり、大人におもしろいという条件を満足させるのはむずかしいことだ。小学生の中にはスライドを見たとき、「あ、あれはムクドリだ」と叫ぶ子や、「あの鳥は家にもきたよ」と説明する子など講師の一方的なお話ではなく、対話的な雰囲気があったと思う。

そのあと外に出て博物館の前庭や動物園で星座観察を行なった。さいわい晴れていて、星座観察にはもってこいの空だ。光化学スモッグとやらで以前よりも弱々しく見える星の光も、まだ大町ではずいぶん美しい。何だか安心すると同時に寂しくも思う。

翌日の朝早い出発のために、九時二十分には消灯の予定だったが少し

遅れた。山岳総合センターの宿泊施設は一部屋に八人が入るベッドシステムになっており、友だちどうしで参加を申し込んだ小学生の中には、この宿泊が楽しみで来たらしい子が多く、なかなか寝てくれないのは困った。

二十六日は四時起床、まだうす暗さが残っている湿った空気の中に飛び出していくと、もういろいろな鳥がさえずっている。「皆、ちゃんと起きられたかな。鳥たちは早起きなんだから、早く出てこないか鳴かなくなっちゃうぞ」などと思いつきながら待つ。四時半にはその日に参加する人も加わって、博物館裏の鷹狩山まで探鳥に出かける。鷹狩山は標高一六六メートルで、頂上まで三メートルほどの道がついている。道の端までいろいろな木々や草花がはえており、小学校低学年から六十才以上の方まで幅広い階層を対象としての探鳥会には、まあまあコースである。大町中心、小中学生を中心とした四十人ほどの二班を編成し、それぞれの班に一人ずつ指導者がつく。前の班が出発してから、二十分ぐらい遅れてもう一つの班が出かける。この日確認された鳥は、佐野先生のメモによると二十五種である。ハシボソガラス、ムクドリ、カケス、スズメ、ホオジロ、ノジコ、キセキレイ、シジュウカラ、モズ、アカモズ(菓と卵)、ヒヨドリ、キビタキ、オオルリ、ウグイス、センダイムシクイ、メボソムシクイ、マミジロ、クロツグミ、コルリ、イワツバメ、コゲラ、トビ、ホトトギス、カクコウ、キジである。

「ほら、今鳴いている『ツツビー、ツツビー』というのがシジュウカラです。」  
「なるほど」という顔つきで皆をちらに注意を集中する。初めて探鳥会に参加するという人が大部分なので、鳴き方を区別したり姿を確認するのは、なかなかむずかしいようだが一生懸命である。  
七時過ぎに鷹狩山の頂上に着き、すでに活

動はじめた大町市街や、眼の前に広がる北アルプスを眺めながら朝食をとる。

ここで、唐花見、相川、清音の滝の方へハイキングに行く班と博物館まで戻って解散する班とに別れる。ハイキングに行ったのは二十名ぐらいで、小学生が大部分である。探鳥会の時は息をひそめ、足音をさせないようにと、やや緊張した雰囲気であったが、今度はずつかり昇りきった太陽のもとを友だちどうしで話をしたり、山菜を採ったり、草花の説明を聞いたりの三時間ほどのハイイクである。ムラサキヤシオツツジやセイヨウタンポポがいたるところ咲きみだれていた。

今回初めての試みとして、一般参加者に対して、「小鳥の声を聞く会」に参加しての感想や意見を書いて郵送していただくようお願いした。十三通ほど送られてきたが、その中で、行事の日程にもう少し時間的にゆとりをもたしたらどうかという意見が目立った。確かに、あまりにもぎっしりと組み込みすぎ、特に集団生活に慣れていない子供にとっては、少きつ日程ではないかと思う。実際、すべてが日程が時間的に少きつ遅れていたのは、役員の段取りが良くなかったこともさることながら、やはり、日程の組み方に無理があったためであろう。

その他に、テープによる小鳥の声の学習、鳥の生態、見わけ方についての基礎知識の学習の必要、班編成の問題、実施回数の問題、一般社会人の参加の少ないことなどが出された。これらの意見の中には、財政面や行政面から考えていかなければならない問題も多く、自然保護運動というものを、更には人間をも含んだ自然というものを、もう一度考えてみる必要があるのを感じた。(山博学芸員補)

山と博物館第19巻第6号  
発行所 長野県大町市TEL(026)22-1111  
印刷所 大町市下仲町山岳博物館  
大町市大系タイムス印刷部  
定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野)一三二九三三